

論文の内容の要旨

論文題目 理由の空間の現象学——表象的志向性批判

氏名 門脇俊介

この論文は、人間が世界に赴き世界に住まうことを可能にするものとして、20世紀の哲学が導入した「志向性」の概念を、現象学的伝統と分析哲学的伝統の両者にまたがって検討し、志向性の仕組みを、私と他者とがともに参与し批判的会話を交わす「理由の空間」として解釈することをめざしている。

序論においては、この論文全体にかかわる重要な概念が導入される。近代の初頭以来意識とその対象との関係を、指示関係にならった意味論的モデルに基づいて把握しようとする「表象主義1」は、志向性の理解のためには不適切な発想であって、文あるいは命題を単位とする「表象主義2」（カント、フレーゲ、デイヴィッドソン）こそが、志向性に内在する規範的関係を正確にとらえることができることがまず確認される。表象主義2における志向性の概念は、真であるとみなす・端的に行為するという「コミットメント」と、推論的な「理由の空間」という志向性の全体論的脈絡においてのみ成立するという二つの性格を持つ。フッサールとハイデガーの現象学はさらに、この推論的な「理由の空間」の基底に、非推論的な「理由の空間」とそれによって可能になる根源的な志向性を見いだした。表象主義2は、根源的な志向性を認める「反表象主義」に訴えることなしには不完全であり、この点を最も徹底して強調したのはハイデガーであった。さらに、「理由の空間」と志向性に関するこうした理解から、他者についての志向性の「帰属」という問題にも新しい光が投げかけられる。

1章は、フッサールの初期から後期までの著作を検討することを通して、表象主義1に基づいた基礎づけ主義の擁護者という従来からのフッサール像を訂正し、フッサールをむしろ表象主義1の強力な批判者として解釈する。フッサールは、知覚的志向性におけるコミットメントの意味を正しくとらえ、何らかの知覚をその部分として可能にする志向性の全体論的構造を「地平」の概念を用いて明らかにした。フッサールは、コミットメントと全体論的性格を志向性に認める表象主義2の強力な推進者であるとともに、これらの志向性の性格を明示的命題を形成しない知覚的志向性について指摘した点で、反表象主義への道を拓きつつあった。知覚的志向性に関するフッサールのこうした議論を前提にすることによって、後期フッサールの「生活世界」の概念を、より正確に理解することができることも示されている。

2章は、志向性を意識に内在する心的状態としてではなく、人の語りふるまっていることと周囲の状況とに基づいて理解しようとする「解釈主義」の立場から、志向性と言語に関する古典的な立場（中期のフッサール、サル）を批判している。すなわち、言語の意味とは、すでに意識の内部に潜在した命題的志向性が外界に転写されて、物理的な記号に背負わされるときに成立するという立場を批判しているのである。信念や意図のような志向性の帰属なしには言語理解が成立しないことを認めると同時に、このような志向性の成立が逆に社会的に構成された言語によって可能になるという点が、批判の基礎となっている。

3章は、話者とその発話の理解者（解釈者）とのあいだで成立する志向性の体制の規範的な網の目の内部でのみ、言語の意味は理解可能になるという、デイヴィドソン流の解釈論的規範主義の立場を擁護する。近年の認知意味論が、根源的な志向性を分節化しているような「受肉」した意味の探究を提案していることを評価した上で、「理由の空間」に内在する真理や合理性といった規範的概念なしに、意味の探究を進めようとしている点に、認知意味論の錯誤が存することを指摘している。

4章は、意図の志向性が欲求に還元不可能で、行為のコミットメントをなす担い手であることが自覚されてきた経過を追跡している。そのさい、意図が欲求に還元不可能であるという主張は、意図が、欲求・信念モデルから説明可能な意図的行為に還元不可能であるという主張として理解される。意図的行為に還元不可能であることは、欲求と区別された固有の心的状態としての「意図」という概念を成立させるか（デイヴィドソン）、あるいは意図的行為のうち何らかの未来の状態へ向かう位相を見いだすか（アンスコム、ウィルソン）である。前者の場合は、古典的意志論という修復不可能な説を復活させかねない危険をはらむこと、後者の場合は、未来の目的からのふるまいの統御をどう考えるべきかについての困難を抱えることが明確にされ、5章におけるハイデガーの行為論による解決の前提が与えられる。

5章は、前期ハイデガーにおける探究主題としての「存在者の存在」が、「理由の空間」という非因果的な様相で、何らかの存在者が会われることを可能にする全体論的条件であり、このことをハイデガーは、カントの「存在論的ア・プリオリ」の概念から引き継いでいることを論じている。『存在と時間』におけるハイデガーは、道具的存在者、現存在、事物的存在者のそれぞれの存在論的カテ

ゴリーに対応して、それらの存在者の出現を可能にする全体論的条件を探究しており、そうした条件は、理解可能性、適所性、方向づけ、コミットメントといった、非推論的な志向性の構造から理解されることがこの章で解明されている。さらに、このような構造に注目することによって、表象的志向性の把握を拒むコンテキストとしての「世界」、心的状態としての意志や明示的な目的表象抜きの意味的行為の成立、一定のコンテキストに依存しながらもコンテキストを無効化する自己解釈を内蔵する科学理論、などの諸現象が明らかにされる。

6章は、これまで「内的体験の記述」の方法から比較されてきた、アウグスティヌスとフッサールを、むしろ表象主義¹や、現前への内的意識としての「表象的志向性」に対する、共同の批判者として解釈する方向を提示している。両者が明らかにしている「知覚の目的論」は、知覚を、単なる現前の意識としてではなく、むしろ行為であるか行為に接続する「強い意味での志向」としてとらえているのであり、存在論や時間論もこうした非表象主義的な観点から再考されるべきであることが論じられる。